

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月20日現在

機関番号：32636

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K18489

研究課題名(和文)類義表現のレジスター別文体的特徴に関する研究

研究課題名(英文)The Stylistic Characteristics for Academic Register Level of Japanese Synonyms

研究代表者

高野 愛子(TAKANO, Aiko)

大東文化大学・外国語学部・助教

研究者番号：30771159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：専門分野・母語・日本語レベルの多様な執筆者による作文コーパスを構築し、文体が分析可能なデータを作成した。

そのデータと大学教員による添削調査から、学術的文章のレジスターとしては不適切とされる「ちょっと、だから、そうだ、全部、一番」とその類義表現に関し許容度を分析した。その結果、「そうだ」が78.2%でもっとも高く、「なので」が8.7%でもっとも低く、語によって許容範囲が異なることが明らかとなった。また、理解の面では、「どんな、持って、と一緒に、違って、たくさん」が不適切であるということが、日本語のレベルや母語を問わず特に低いことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既存の教科書等は、学術的文章のレジスターとして文体差のある類義表現の適切・不適切な一覧を示しているが、実際にどのような表現が理解されておらず、不適切に用いられやすいかについては言及されていない。そこで、本研究では、主に日本語学習者の理解と運用の実態を示し、さらに教員による許容範囲を明らかにした。本研究で扱ったのは多数ある類義表現の組み合わせのうちの一部にすぎないが、執筆時や添削時に留意すべき表現の実例を数値的に例示した。このことから、教科書とは異なる視点を示すことができ、学習者が表現を選択し、教員が添削する際の判断に寄与するものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：We built the composition corpus by the writer of a variety of attributes of a specialized field, the mother tongue and the Japanese level and made analyzable data including a writing style variously.

研究分野：日本語教育学

キーワード：文体差 レジスター別 学術的文章 レポート 論文 運用 認識 日本語学習者

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

既存の辞書・教科書には文体に関する情報が不足し、扱われている語の種類や数が教科書によって異なる上、文体の段階の基準も異なっている。各大学の日本語学習者に対しレポートとしての作文を指導するなか、類義関係にある多様な語の中から適切な表現を選択することが困難であることが判明したことから、とくに日本語学習者にとってどのような表現が実際に問題となっているのかを明らかにする必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、文体差のある類義表現(例: すごく・とても・大変・非常に・極めて等)に関し、レポート・論文など学術的文章のレジスターにおいて日本語学習者がどのように理解し、運用しているか、またそれらの表現を大学教員は許容しているのかを明らかにし、文章表現の学習や教育に寄与することである。計量的なデータと実際の用例を両方示すことで、日本語学習者が自分自身でレポート・論文を書く際に適切な表現を選択できるようになることを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) レポート・論文など学術的文章のレジスターの文体に関する運用状況・認識度を測るため、国内の大学等6機関、海外の大学3機関に所属する大学生;計200名(日本語学習者176名・日本語母語話者24名)を対象に、「レポートとしての作文執筆調査」・「文体差のある類義表現に関する認識調査」を行った。また、学術的文章のレジスターとして不適切な語を抽出し、許容範囲を明らかにするため、収集した計200編の作文のうち50編の添削を大学教員に依頼し、23名の添削状況を分析した。

(2) 「レポートとしての作文執筆調査」は、以下のような方法で行った。

各大学等機関に協力を依頼し、主として中級以上の日本語学習者、日本語母語話者に事前に以下の内容を知らせる案内をもって募集した。

テーマ「専門分野または研究テーマに関する説明と考察」、制限時間60分、原稿用紙(600~800字前後)への手書き、辞書使用可(漢字以外に調べて用いた言葉に下線を記すよう指示)。

調査完了後、これらの作文が分析できるよう、コーパスとして検索可能なデータにするため、全てテキスト化を行った。

(3) 「大学教員による添削調査」は、以下のような方法で行った。

大学教員による添削の共通点・相違点を比較・分析し、判断基準や許容範囲を探るため、収集した計200編の作文から母語・日本語能力・専門分野を考慮して抽出した同じ50編の添削を依頼した。条件は以下である。

添削は、手書きによる原稿をコピーしたものに、直接記入する。

大学教員に提出する「レポート・論文」など学術的文章の文体として適切な表現かどうかを判断し、不適切であると判断した語・表現に対し「代替の表現を示す・追加する・削除する」という方法による。なお、文体に特化するため、通常の添削で行われる「文法・漢字・表記の正誤」に関する添削は不要とした。

(4) 「文体差のある類義表現に関する認識調査」は、以下のような方法で行った。

予め用意した論説スタイルの文章を回答者に提示した上で、提示文の文体レベルとして不適切な箇所を見つけ、より適切な類義表現に言い換えるよう指示を行った。回答者には、置き換え対象となった語句と、その数については知らせない。

置き換えた語句は、学術的文章としては文体的に不適切とされる類義表現であり、以下の21件である。「ている てる、非常に すごく、どのような どんな、さまざまな いろいろな、行って やって、という そうだ、とって、が けど、しかし でも、や とか、もっとも 一番、所有して 持って、多く たくさん、とともに と一緒に、さらに もっと、では じゃあ、異なり 違って、やはり やっぱり、どちら どちら、なお あと、だろう でしょう」

### 4. 研究成果

(1) 既存の教科書には、文体差のある類義表現同士の一覧は示されていても一部であり、どのような表現が学術的文章のレジスターとして不適切に用いられやすいかについては言及されていない。本研究により、日本語学習者をはじめとする大学生の運用と理解に関して実態の特徴を示すことができた。また、教員が添削する際には必ずしも教科書通りの基準となっていないことも明らかとなった。

(2) 「レポートとしての作文執筆調査」から、専門分野が文学・外国語・教育・社会・理工・芸術である日本語学習者と日本語母語話者という、多様な属性の執筆者による作文コーパスを構築した。日本語学習者は、レベルが日本語能力試験N1~N5、母語が、英語・イタリア語・スペイン語・セルビア語・アラビア語・ロシア語・ベトナム語・インドネシア語・韓国語・中国語

である。

(3) 「大学教員による添削調査」から、学術的文章のレジスターとして適切な表現かどうか、教員による判断基準の共通点と相違点に注目した。そのうち、程度副詞「ちょっと」、順接接続詞「だから」、伝聞の助動詞「そうだ」、漢語「全部」、漢語「一番」とその類義表現に関し、同一の添削箇所に対する添削の許容度を分析した。その結果、もっとも許容度が高かったのは「そうだ」78.2%であった。続いて「全部(名詞)」68.1%、「一番」54.8%、「それで(順接)」53.6%、「全部(副詞)」43.5%、「ちょっと」37.5%、「だから」30.0%であり、もっとも低かったのは「なので(順接)」8.7%であった。このことから、語句によって許容範囲の幅が異なることが明らかとなり、学習者には意識化を促し、教員自身も意識的に添削をする必要があることを示すことができた。

(4) 「文体差のある類義表現に関する認識調査」から、提示文の文体レベルとして不適切な箇所を見つけ、より適切な類義表現に言い換えられたかの割合(検出率)を日本語力別に分析した(図1)。その結果、母語や日本語のレベルを問わず、「どんな」「持って」「と一緒に」「違って」「たくさん」が不適切であるという認識がとくに低いことが明らかとなった。このことから、これらの表現に関して意識化できるよう指導し、教員自身も意識的に添削をする必要があることを示すことができた。

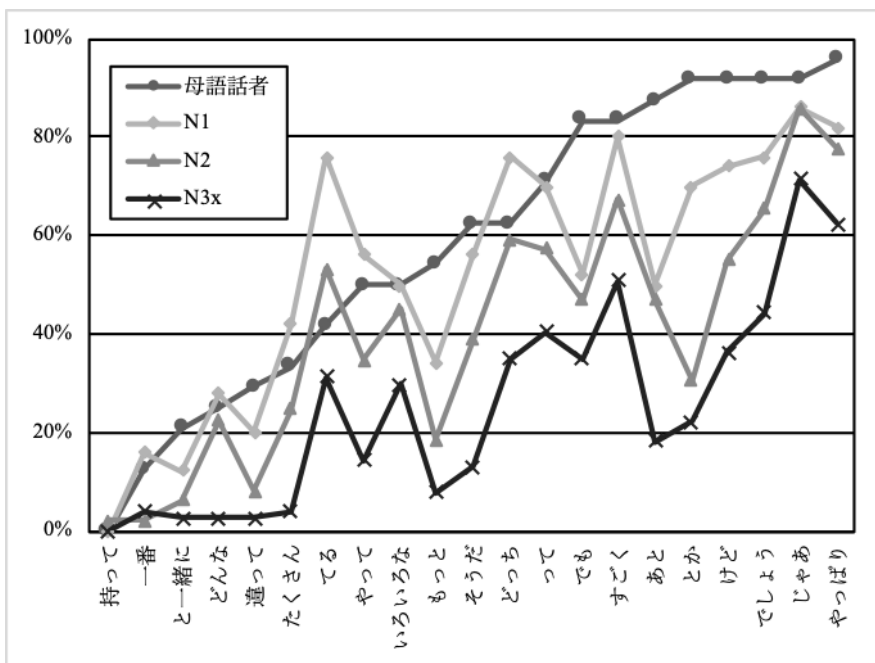


図1: 日本語力別に見た各語句の検出率

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

上村圭介・高野愛子(2018)「学術的文章における文体差の認識 - 母語話者・日本語学習者を対象とした調査から - 」寺村政男編『水門(みなと)の会 特別刊行叢書 言語の研究』pp.108-122. 査読無

高野愛子(2018)「学術的文章における漢語副詞「一番」の適切性 - 大学生の運用状況と大学教員による判断 - 」寺村政男編『水門(みなと)の会 特別刊行叢書 言語の研究』pp.123-132. 査読無

高野愛子(2017)「現代日本語における文体的特徴の記述と段階 - 辞書と教科書の現状 - 」『言語の世界』言語研究学会, Vol. 35, No. 2, pp. 75-90. 査読有

[学会発表](計3件)

高野愛子・上村圭介「学術的文章における文体差に関する認識 - 日本人学生・日本語学習者を対象とした調査から - 」2018年日本語教育国際研究大会(於ヴェネツィア大学: Venice, ITALY, 2018年8月3日) Venezia ICJLE 2018; The 2018 International Conference on Japanese Language Education @ Ca' Foscari University of Venice, ITALY

高野愛子「学術的文章における漢語の適切性 - 漢語と和語の文体差 - 」国際シンポジウム『東アジア漢文圏における日本語教育・日本学研究的な新たな開拓』暨南大学・広東省本科大学外国語学科教学指導委員会・亜非言語学科分委員会・中国教学研究会華南分会主催(於暨南大学: 中国・広州, 2017年12月23日)

高野愛子「ジャンルによる文体差 - 学術論文とエッセイの間 - 」国際シンポジウム第9回

「東西文化の融合」大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻開催（於大東文化会館,東京都,2017年11月5日）

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：上村 圭介  
ローマ字氏名：(KAMIMURA, Keisuke)  
所属研究機関名：大東文化大学  
部局名：外国語学部日本語学科  
職名：教授  
研究者番号：10319014

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：石田 恵里子  
ローマ字氏名：(ISHIDA, Eriko)  
所属研究機関名：東京藝術大学  
部局名：グローバルサポートセンター  
職名：特任講師  
研究者番号：10774135

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。